

# 俳人編集者の四季

谷村和典  
(谷村綱夢)

1

## 「そこのそこの」と「相変わらず」が文化を守る

### ◆「古典の日」を「存知かな」

一年の中に何日か、「〇〇の日」という日付がある。1月でいえば「成人の日」がそうだし、5月の「こどもの日」や9月の「敬老の日」、11月の「文化の日」なども同じ。これらは国の祝日で、「第1条 自由と平和を求めてやまない日本国民が……」で始まる「国民の祝日に関する法律」(通称・祝日法)に定められている。

あるいは、「耳の日」(3月3日)とか「土佐の日」(10月3日)「などというのもある。こちらはそれぞれの関係団体が、対象になっている事象を顕彰したり、注目度を上げるために自分たちで設定したもので、大抵が日にちと話し合わせ。典型的なのが毎月29日の「肉の日」で、11月29日は「いい肉の日」なのだとか。

さて、そうした中で、11月1日は何の日、と訊かれてすぐ答えられる人はどれくらいいるだろうか。実は「古典の日」というのだが、これは2012年の8月に法制化された、歴とした国の記念日である。

ただ、残念ながらどうか、先にあけた祝日法による祝日とはな

っていないし、法制化されてまだ間もないので、なじみが薄いのは仕方がないところかもしれない。では、なぜ11月1日が「古典の日」なのか。これは「紫式部日記」の詳細な検討によって、少なくとも1008年の11月1日には、あの「源氏物語」が存在していたことが証明されたことによる。

「源氏物語」といえば、世界的な古典であり、わが国が誇る偉大な文化遺産だということは何も知らず。しかし、源氏物語が書かれた平安時代中期当時は、その文学的評価はさほど高くはなかったという。むしろ、宮中の女房たちが気安く読める読み物、という受け止め方がもたらされた。

そうした評価が、ある人の言で、一変する。藤原定家、平安末期の大歌人。息子の定家とともに「歌聖」と言われ、和歌の世界では神格化されている。

平安時代の文化叢書の第一は「歌」。これがまずければ出世にも響く。宮廷や貴族の間では「歌合わせ」という和歌コンテストのよまんなものが盛んに行われた。そして、「歌合わせ」には「判者」



冷泉家の祖、藤原定家が撰をした「小倉百人一首」は、今もお正月の代表的な遊び

という審査委員長のような役があり、「判者」を最も多く務めたのが藤原俊成であった。

その歌道の大権威である藤原俊成が「源氏見ざる歌歌みは遺恨のこたまり」、つまり「源氏物語を知らないようなやつはだめだ」と言った。

このことで、いわば「源氏物語の評価」は定まった。そしてそれが千年後の平成の世の、国の記念日「古典の日」につながったのである。

### ◆冷泉家の「守る力」に学ぶ

俊成の息子、藤原定家ももちろん日本文学史上最重要人物のひとつ。新古今集の撰や定家流といわれる書で有名なが、一般的に最も知られているのが「小倉百人一首」の撰。お正月の代表的な遊びであり、日本人の基礎的な教養を育んでくれたあの「百人一首」はこの公卿が選出してくれたもの。

京都・洛西の小倉山(現在の嵐山周辺)は平安貴族の隠棲の地であり、定家自身も「小倉山荘」を構えたことから、定家撰の百人一首は「小倉百人一首」と呼ばれるようになった。

この藤原俊成・定家を祖とし、今も続いている家がある。「歌道の家元」といわれる冷泉家。京都御所の北側、三方を同志社大学に囲まれた場所に残るその屋敷は、現存する最古の「公家屋敷」として重要文化財に指定されている。

そして、今もそこに住む冷泉家26代当主夫人、冷泉貴実子さんの著書「冷泉家八〇〇年の「守る力」」(集英社新書)が大きな話題を呼んでいる。なぜ、全国紙や有力雑誌がこぞってこの著作に注

目したのか。それは、判断基準を失って混迷の度を深める現代日本に対する強烈な批判をこころから読み取ったからだろう。

冷泉家は「歌道の家元」として公家だけでなく、徳川将軍家や松坂屋などの豪商も弟子とし、門弟3千人と言われた。

明治初期、天皇と共にほとんどの公家が東京に移る中、冷泉家は京都に残る。それは、冷泉家の蔵「御文庫」の中に、俊成撰の「古采風林抄」、定家撰の「明月記」「古今和歌集」といった国宝をはじめとする膨大な典籍が保存されているからだ。

冷泉家は俊成、定家を「神さん」とし、二人が残した典籍も含め、「大事にせんかったらバチが当たる」として守り続けてきた。その持統力は、代々の当主が自らを「そこの」の人間だと謙虚に自覚し、「相変わらず」が一番、という生き方を自らに課してきたことによるという。

これは、一つの見識であり、腹の括り方でもあるだろう。だからこそ、世界に誇れる文化財が守られてきた。そこには「武の力」に優る「文の力」といった確みさえ感じられる。

私も含め、新奇なものを必死で追い、人を導くことを声高に言い募るばかりの「現代日本人」は、何と愚かなのだろうと思う。「そこの」で「相変わらず」が一番である。

(室戸市出身、東京都在住)